ヤスパースの哲学を現代社会に生かす

国際関係・平野　明彦教授

国際哲学会議で発表する平野教授

平野明彦教授の研究対象は、1930～60年代に活躍したドイツの哲学者、カール・ヤスパース。著作のテクスト・クリティーク（史料批判・分析等）を通してヤスパース哲学の本質を紐解くとともに、その思想を21世紀の現代社会に生かす道を探っている。

従来の研究では、ヤスパースは〝実存主義の代表的思想家の一人〟と見なされていた。しかし平野教授は、「後半期のヤスパースは、実存よりもむしろ〝理性〟に重きを置いた」と指摘する。

実存主義とは、人間一人ひとりがかけがえのない個であるとする考え方だ。一方、ドイツ語の〝理性〟という言葉には、異なる価値観や思想に耳を傾ける、というニュアンスが含まれる。

「つまり後半期のヤスパースは、実存主義の思想をさらに発展させ、他者とのコミュニケーションによって異なる価値を認めていく〝理性〟を重視したのです。私は彼のこの思想が、現代のグローバリズムにまつわる諸問題を解決する糸口になると考えています」。

地球を一つの共同体ととらえ、環境や人権などの問題に世界的な基準を設けようというのがグローバリズムの基本的な考え方だ。しかしそれは同時に、欧米的な価値観が世界を支配してしまう危険性も秘めている。ある時代の到来を予見していました。そうした状況の中で、どの分野については確かに世界共通のルールが必要だが、その一方で、ヨーロッパを起源としない伝統や宗教から生まれた多様な文化、多様な価値観をどうやって承認していくか。これは現代社会が抱える深刻な問題だ。

平野教授によると、「ヤスパースは1931年に著した『現代の精神的状況』の中ですでに、ある一つの価値観が世界をひとつの価値観に均一化させる時代の到来を予見していました。そうした状況の中で、どのように独自の伝統や価値観、一人ひとりの個性を大切にしていくかは、彼の主要なテーマでした。

ヤスパースの〝理性〟に光

哲学研究を通して社会問題に迫る

後年のヤスパースが〝理性〟すなわちコミュニケーションを重視するようになったことは、この問題に対するひとつの答えといえるでしょう」。

ヤスパースは、コミュニケーションを通して異なる価値観を尊重し、互いの個性を認め合う必要性を説いた。では、そのコミュニケーションの場を、いかにして現実世界につくり出すのか。平野教授はこの問題と向き合うにあたって、ヤスパースの弟子であり、アメリカの政治思想家であるハンナ・アーレントに注目した。

アーレントとの比較研究

「ヤスパースの説くコミュニケーションが、個々の人間同士の私的な対話の域を脱しない印象があるのに対して、アーレントはより公的・政治的な場での対話を実践しようとした人物です。私はここに、ヤスパースの哲学を現代社会で実現するための手がかりがあると考えたのです」と平野教授。現在はそのヒントを探るべく、両者の思想的な類似性・相違性や、ヤスパースのアーレント観を明らかにする研究に力を注いでいる。

ゼミでの指導風景

実はこれまで、アーレントは最初の師であるハイデガーからの影響が大きく、アーレントとヤスパースとの思想的な関係は薄いと考えられてきた。そのため両者の比較研究はほとんど前例がない。

しかし近年、晩年のヤスパースがアーレントに関する膨大な資料を収集し、彼女についての本を書こうとしていたことが明らかになり、両者の関係は注目を集めつつある。

「この本は結局出版されることはなかったものの、数千枚におよぶ資料や草稿がドイツの文献資料館に残されています。その資料を分析し、ヤスパースがアーレントをどう捉え、どのような本を書こうとしていたかを明らかにすることが、現在の中心テーマです」と平野教授。2013年の国際哲学会議に向けて精力的に研究を進めている。

プロフィル

平野明彦（ひらの・あきひこ）平成2年日本大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程単位取得満期退学。日本大学文理学部助手を経て平成10年より国際関係学部に奉職し、現在同学部教授。平成20年国際文化表現学会賞受賞。専門は哲学・倫理学。日本倫理学会、日本ヤスパース協会などに所属。ドイツの専門誌に掲載された論文をはじめ、著書多数。栃木県出身。52歳。

コンピューターで創る最適設計

生産工・三井　和男教授

コンピューターで作製した立体モデルを手にする三井教授

自然界の動物や植物は、その形や動きが理にかなっていることに驚かされる。例えば卵や貝殻。進化の過程で無駄がそぎ落とされ、その環境の中で望ましい形、強度を獲得している。だから美しい。

「進化的構造最適化のなせる業と言えます。私が卵をイメージした建物などの構造物を作るとすると、卵の形の理にかなった部分から数学モデルを導き出す。コンピューター言語（アルゴリズム）に置き換えてデザイン、設計をすることになります」。

計算工学のなかでも、構造工学に関わるシミュレーションが専門の三井教授は、生物の進化とか遺伝のなせる業などを数式、数学モデルにしてコンピューターに取り込み、デザインや設計で最適の解答、斬新な解答を求める研究をしている。

「生物の形以外にも、その行動、仕組みからアイデアをもらうことも多い」という。アリはえさにたどり着くと、そのうち、仲間のアリ全てが一つの道筋を行き来する。その最短、最適の道にはアリが通るたびに残すフェロモンが蓄積される。すなわち、使ったところは強化され、使わないところは消えていく。迷ったり、寄り道することはない。この「群れの知」も数学的な処理で構造物設計の強度に関して一番適切な「解」を探すのに役立つ。名刺にアリの絵をあしらっているのは、発想をもらったことに対する感謝の印だ。

学科は多彩な顔ぶれ

計算工学は、日本に学会が出来たのが1994年と新しい学問だ。理論をもとに何か物を作るためには従来、時間と労力をかけて大がかりな実験、実証を繰り返さなくてはならなかった。コンピューターと計算工学がそれを激変させた。コンピューターの処理能力の進化と、周辺技術の進歩で、いまではデザイン・設計の「解」を選択出来るようになった。

実際、自動車産業は車体から小さな部品まで、いまではこの計算工学がなくては成り立たないだろう。「大量生産の自動車には、多くの研究者、資金が投入され、強度、軽量化、安全性、乗り心地、デザインなどあらゆる面でコンピューター（計算工学）を使って『最適』を追究しています」。いま建設が進んでいる日本一高いスカイツリー（634㍍）も計算工学なくしては建たない。21世紀の技術革新を担う先端科学といわれるゆえんだ。

所属するデザイン創生学科は、この4月で満2歳。アイデアとやわらかい工学がコンピューターで融合、新時代のデザインを生むと、謳っている。

三井教授は数理情報工学の出身だが、15人の教員は建築、機械、人間工学、照明デザイン、芸術と多彩な顔ぶれ。人材を育てるのが新設の狙いだ。

教え子が主力の時代に

学生に対しては常々「自分の守備範囲を決めずに、貪欲に知識や情報のアンテナを広げて欲しい」と激励している。自分自身、「若いころコンピューター以外に生物のことも、もっと興味を持っていれば、いまの研究でアイデアのひらめきも違ったはず」と、思うことがよくあるからだ。

「近い将来、教え子たちが斬新な物を作る主力となる時代がくる。待ち遠しい」という。

家庭は子供3人の5人家族。映画音楽を弾きたくて3年前にピアノ教室に通い始めた。名曲ムーンリバーを気持ちよく弾いていると、音楽大学でピアノを専攻していた妻は厳しい目を向ける。ほのぼのとした、うらやましい光景が目に浮かぶ。

設計・デザイン情報を入力（右）すると、立体モデルが左側の装置で作製出来る

自然界に内在する理想の論理

技術革新を担う先端科学

数学モデルに変換、物作りに生かす

プロフィル

三井　和男（みつい・かずお）昭和52年生産工学部数理工学科卒、54年大学院生産工学研究科修了。副手、助教授を経て平成21年教授。新設2年目の創生デザイン学科で専門は計算工学。日本建築学会（情報システム技術委員会幹事）、情報処理学会、国際シェル空間構造学会などに所属。「新Excelコンピュータシミュレーション」（森北出版）など著書多数。山梨県出身。56歳。